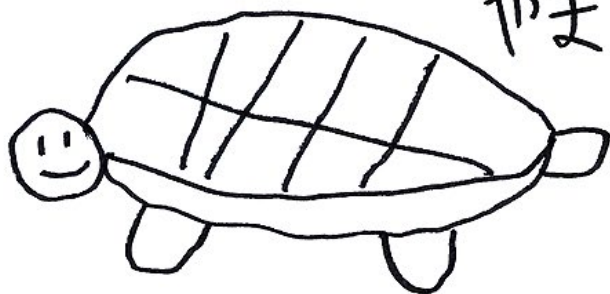


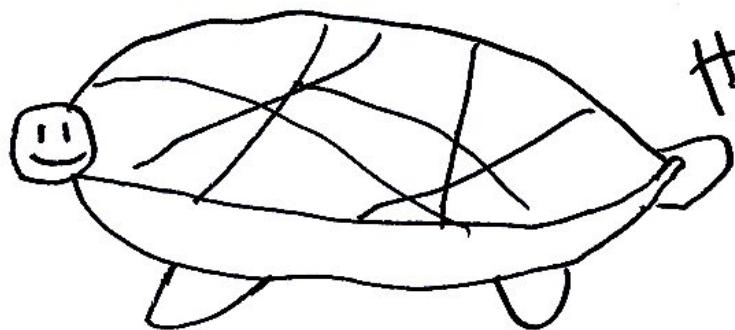
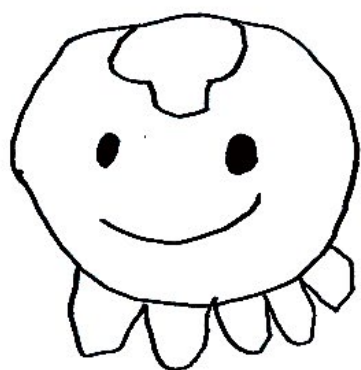
とよ・たち 美肌通信
5月号 vol. 166



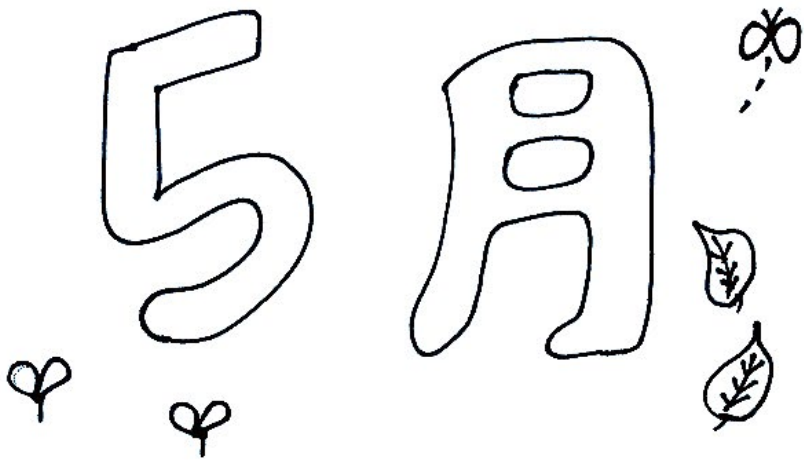
ゆりひ
やまと



とよたち 美肌通信
5月号 vol.166



ゆーひ
やまと



今月号のとびにち美肌通信の表紙は
みずくらげと かめが仲良く遊んでいる絵です。
海の中で遊んでいるのかよ。
本を読むことが好きなお兄ちゃんと骨太うことが好きなお
弟さんがそれぞれ描いてくださいました！
2人とも給食が好きで、表紙に描いてくれた
みずくらげと かめが大好きです。
2人のように元気いっはいの表紙です。ありがとうございます。
院長はじめ スタッフ一同、心より感謝いたします。

現代では普通「しあわせ」とは「幸せ」と表現する。室町時代まで遡ると「しあわせ」は「仕合わせ」と表現していたとされ、「仕合わせ」はイコール「巡り合わせ」と同様に用いられていたようである。それが時代の変遷と共に江戸時代頃になると、幸福な状態のことを「仕合わせ」と言い始めたという説があり、それが現代では「幸せ」=「幸福」と表現するに至ったとされています。

では現代日本人はどんな事に幸福(幸せ)を感じるのかという。ある統計によると、「家族の健康」「家族との深い絆」であったりと家族をキーワードとするものが多数を占め、その他には「異性との良好な関係」「恵まれた容姿」「社会に認められる」「地位が上がる」「物欲・金銭欲」「ゆとり」等と多岐にわたっていた。

さて、先に述べた「幸福」の代名詞とも言える「家族との〇〇」であるが、一方である意見によれば「家族」こそが幸福を妨げる元凶だと論じている人もいる。『両親の子供に対する愛情と、子供の両親に対する愛情は幸福の最大の源の一つとなりうるのに、現代では、親子関係は十のうち九までは両者にとって不幸の源になっており、百のうち九十九の場合、

少なくとも一方にとって不幸の源になっている』(バートランド・ラッセル・幸福論から)。加賀正彦氏はその著書である「不幸な国の幸福論」の中で幸福を定義してはならないと言っているのですが、個人的には私も同感です。

個人や家族に代表される小集団における「幸福感」は千差万別・十人十色であり定義付けられるものではないと考えます。価値感というか、例えれば「心の持ち様をどの焦点に合わせるかによって幸福感は異なるのだ」と思う。但しそこには一つだけ条件があって、それは他者をおとし入れないこと。常に善悪の判断に基づいた自己の幸福を追求していくことが重要なのだと感じます。

院長, 拝